

書評 Book Reviews

深尾 幸市

デニ・ムクウェゲ / ベッティル・オーケルンド著

『すべては救済のため デニ・ムクウェゲ自伝』

あすなろ書房 295頁 ¥1,600

私たちが使うスマホやパソコンの心臓部に使用されている稀少な鉱石コルタンは、その8割がコンゴ民主共和国（旧ザイール）の東部に眠っているとされる。この地の武装集団は、稀少資源の闇市から利益を得ながら、支配地を広げようと争ってきた。本書表紙裏面に「『もう一度女性に見えるようにしてください。私には大事なことです。先生どうかお願いします！』— 手術の前に何度このように懇願されたことか。コンゴ民主共和国では、レイプは住民を服従させる手段として組織的に用いられている。民兵は村々を焼き払い、住民を殺しているが、彼らの最大の武器は性暴力だ。彼女たちが誇りを取り戻し、それを通じて国民全体も誇りを取り戻せるように、その日が来るまで私は闘う。たとえ人生を危険にさらしても。その日が来るのを見届けること。それが私の何よりの願いだ。」

2018年ノーベル平和賞受賞した著者は述べている。

経歴は、1955年、コンゴ民主共和国生まれ。隣国ブルンジで医学を修め、病院勤務とフランス留学を経て産婦人科医になる。1999年故郷ブガヴにパンジ病院を設立、4万人以上の性暴力被害者の治療と支援にあたってきた。また、コンゴ東部に蔓延する性暴力の撲滅と女性地位向上を国際社会に訴える活動にも取り組み、国連人権賞（2008年）、サハロフ賞（2014年）など数々の賞を受賞している。

では、本書・「自伝」を紹介するにあたり、年表を追ってから内容を見ることにする。

1955年 3月コンゴ東部、ブガヴで生まれる。生誕直後に深刻な感染症にかかるが、スエーデン人女性教師の奔走で一命を取りとめる。

1960年 コンゴ独立。

1961年 初代首相パトリス・ルムンバが殺害される。

1964年 反政府勢力による大規模な蜂起が発生し家族と逃げる際無差別殺戮を目撃する。

1965年 軍事クーデターを通じてモブツが権力を掌握する。前政府の閣僚4人が公開処刑される。

1967年 傭兵部隊がブガヴを攻撃。自宅に砲弾が落ち部屋にいた若者二人が命を落とす。

私は田舎に逃れていたもので無事だった。

1971年 モブツ大統領が〈真正化政策〉を開始。国名も「ザイール」に変更。更に西洋風の名前が禁止されたため母が“忘れられない人”を意味する〈ムケンゲレ〉に変えた。

1977年 ブルンジの首都ブジュンブラで医学生になる。

1980年 裕福な卸売商の娘マドレーヌと結婚。

1983年 学業を終え、レメラ病院に勤務する。

1984年 産婦人科医になるためフランスに留学。経済的に困窮するが、福引で車が当たり窮地を脱する。

1989年 キブ州の山間部に住む女性たちの出産をケアするためにザイールに帰国。

1992年 レメラ病院の医師兼院長に任命される。モブツ政権が行き詰まり、暴力が蔓延。

1994年 地元住民が私とレメラ病院の一部スタッフを追い出す。ルワンダ大虐殺発生。後 ルワンダからザイール東部に数十万のフツ系住民が難民として押し寄せる。

1996年 第一次コンゴ戦争（～1997）病院襲撃事件では多くの患者とスタッフが殺害される。たまたま不在で私は奇跡的に殺戮を免れる。

1997年 反政府軍の指揮者ローラン・カビラが権力を掌握し国名、ふたたび「コンゴ民主共和国」となる。

1998年 第二次コンゴ戦争（～2003）家族とケニアに逃れる。仕事で短期間ブガヴに戻ったあと、出国を拒まれ、ブガヴに囚われの身となり、当局に監視される。

1999年 パンジ病院誕生、妊婦のケアを専門にする予定が、残虐な性暴力が地域に蔓延し、被害女性の治療に力をいれる。

2001年 カビラ大統領が暗殺される。息子のジョゼフ・カビラが後継大統領。

2002年 パンジ病院正式に開業する。

2004年 ブガヴ再び攻撃される。女性数百人が強姦され、私設診療所銃撃されるが、友人のお蔭で難を逃れる。

2006年 独立後初めての民主的選挙。国連総会で演説。

2008年 国連人権賞を受賞する。

2010年 ジョゼフ・カビラ大統領が初めてパンジ病院を訪れる。（最初で最後）。

2011年 ニューヨーク滞在中、政府要人に脅迫される。クリントン・グローバル・シチズン賞を受賞する。

2013年 短期間ヨーロッパとアメリカで亡命生活を送ったあと、ブガヴに戻る。身の安全を図るため病院の敷地内に住む。フランスのジャック・シラク財団賞受賞。スエーデンのライト・ライブリフッド賞受賞。

2014年 欧州会議よりサハロフ賞受賞。

2016年 日本の支援団体〈コンゴの性暴力と紛争を考える会〉の企画で初訪日を果たす。ソウル平和賞を受賞する。

2018年 ノーベル平和賞を受賞する。

さて、2019年10月7日立命館大学衣笠キャンパスにて、デニ・ムクウェゲ医師 の名誉博士号贈呈式・記念講演会が開催され聴講に出かけた。講演会は「暴力のない世界の実現と女性の人権—SDGs の視点から」 ” Women rights, absence of violence in the context of SDGs ”

従って本書内容紹介は、当日の講演要旨を中心に述べることにしたい。

コンゴが本格的な紛争状態に陥った 1996 年 10 月に、自身が運営する病院が武装勢力により襲撃され、患者やスタッフが虐殺された経緯からその後の様々な事件、脅迫、実践活動を語った。

- ・何より「女性の人権」や「女性への連帯」が最重要課題である。
- ・コンゴ東部では地政学的に紛争が続き、被害者は常に女性と子どもたちである。
- ・現在も続いている「レイプ」は、紛争下で残酷な手段として使われている。
- ・性器を傷つけられた 6 ヶ月の子どもから 80 歳の女性まで病院には毎日 10 人以上運ばれてくる。1999 年以降、10 万人はくだらない。
- ・銃身などを差し入れられ激しく損傷した生殖器の修復に努めている。
- ・術後の女性には退院後のサポート、カウンセリング、セラピー、法的サポートが必要だ。
- ・収入を得るための活動、女性の経済的自立支援、若い女性の高校・大学への進学支援。
- ・妊婦の死亡率が高い現状を直視して対策を講じなければならない。
- ・暴力的性被害者を社会復帰させるための支援が必要だ。
- ・最初に一人に話せばそれで良い。苦しみを力に変えることができるから。
- ・SDGs、17 の国際目標の中でも 1 貧困、2 飢餓、3 保健、4 教育、16 平和を重視する。
- ・鉱物資源をめぐる争いが続く現状に「国際社会は無関心と関わなければならない」。
- ・コルタン / タルタンの埋蔵量は豊富ながら民兵の略奪で民衆は恩恵を受けていない。
- ・資源利用として世界の全ての店で消費者が一人ひとりクリーンに。日本企業にも期待。
- ・対策マッピングつくるも何もなされていない。軍の指導者も見て見ぬふりをしている。
- ・4 つの軸として女性の人権、性暴力の撲滅、教育の保証、女性への経済支援がある。
- ・性暴力、犯罪の無いよりよい世界実現を作ろうではないか。今から直ちに行動しよう。

「私と同僚の医師たちにできるのは性暴力被害女性たちに手術と治療を施し、彼女たちを自宅に帰すことだ。だが、彼女たちが時を置かずしてまた同じような傷を受け、病院に舞い戻ってくることもしばしばだ。私と同僚の医師たちは身体の傷は治せても、私たちの社会を蝕む性暴力という病害の前にはなすすべがない。この国を治療するには、あなた方すべての力が必要なのだ。どうしたら性暴力をなくすことができるだろうか。あるいは少なくともその数を減らすことができるのか？（中略）国の指導者たちと話し合いを試みたが問題に目をつぶり否認するばかりで打開策は見つからない。加えて指導者は責任を放棄して国民の信頼を裏切り、コンゴでおきている犯罪の片棒を担いでいる。」「私と同僚はけっ

して孤軍奮闘しているわけではない。私たちの闘いは世界に支持されている。」「私は望みを捨てていない。この国の状況を変えられると信じている。変化は足もとから、それぞれのコミュニティから生まれなければならない。変化の波がうねりとなって頂きにまでに達するのだ。コンゴ東部を疲弊させている紛争や野蛮でむごたらしい暴力はけっして運命づけられたものではない。腐敗や鉱物資源の違法取引も然り。それらに終止符を打つことはできる。(中略) 国民の一致団結した取り組み、心の革命、考え方の変革が必要なのだ。」「指導者たちは、ひとえに国民の幸せを追求し、壊滅的な状況からこの国をよみがえらせなければならない。」「女性たちを苦しめるこの性暴力の問題に対して新しい指導者が当事者意識を持ち、状況を大きく改善させることだ。残虐行為は一つ残らずやめさせなければならない。その日が来るのを見届けること。それが私の何よりの願いだ。」そして最後にデニ医師は「この問題を解決する手立てを見出すのは、私たちコンゴ人でなければならないのだから。」と結んだ。

講演の様子は、情熱的な語り口、拳を振り上げて参加者に呼び掛けた背の高いデニ博士の姿は感動的であった。

『すべては救済のために デニ・ムクウェゲ自伝』

2019年4月15日 初版発行

著者 Denis Mukwege with Berthild Akerlund

訳者 加藤かおり

仏文 : PLAIDOYER POUR LA VIE